OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	阿部幸大著『まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書』を価値指向モデルで読み解く
Author(s)	山泉, 実
Citation	日本語・日本文化研究. 2025, 35, p. 1-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103790
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

阿部幸大著『まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書』を価値指向モデルで読み解く *

山泉　実

有名になるとは、テクストになることである。――阿部幸大[1]

1. はじめに：検討対象と本稿の主な主張、目的、構成

大学の人文学への風当たりがますます厳しくなっている。筑波大学において、人文・文化学群の下にある人文、比較文化、日本語・日本文化の 3 学類（≒学科）が 2029 年 4 月に統合されることになったという報道は、後に大学が認めることになった。この状況下において、渦中にある筑波大学人文社会系の助教・阿部幸大氏（以下、敬称略。「著者」とも）による『まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書』（以下、『教科書』。光文社、2024 年）が、2025 年 3 月現在 7 万部[2]と、アカデミック・ライティングの教科書としては極めて異例の売れ行きを見せている。阿部は同書や論文集『ナラティヴの被害学』（以下、『被害学』。文学通信、2025 年）及びその他のインタビュー[3]等において、人文学の究極の目的の一つ―彼の人文学にとっては最大の目的―として、「暴力の否定」を繰り返し主張している。一体なぜこのような主張が出てきたのか？ 本稿は、筆者が構築中の価値指向モデルによって、『教科書』『被害学』などに描かれている彼の主張とその背後にある学問観を、特に〈真〉と〈善〉という価値軸に焦点を当てて読み解く。それによって、阿部の一連の著述活動に対する包括的な理解を深め、それを通して本モデルの有効性を示す。

学問は真理の探求であるという認識は、人口に膾炙したものだろう。学問を行う中心的な機関である大学の多くも、紋章やモットーにおいて真理を掲げている（ルキアノフ &ハイト 2022: 13 章 註 1）。また、〈真〉〈善〉〈美〉といった価値が普遍的である、つまり万人にとって等しく価値があるということは、価値を論じる際の暗黙の前提となっている。しかし、万人が〈真〉に価値を感じているわけではない。筆者の分析では、筆者を含む多くの学者と異なり、著者の阿部も〈真〉を指向しているわけではない。つま

* 本稿および本モデルに対して有益なコメントをくださった以下の方々（敬称略）に感謝する：太田陽、鈴木陽登、西畑宏紀、田中太一、宇野良子。本稿の一部は、応用哲学会第 17 回年次研究大会のワークショップ「探求の多元的価値軸モデルの提案とそれを応用した人文科学（者）の分析―言語学（者）の視点から(assisted by ChatGPT)」において発表された。

[1] https://x.com/korpendine/status/1932028148365107226

[2] https://x.com/korpendine/status/1899397801454231743

[3] https://toyokeizai.net/articles/-/885616

り、探求において真理の追求は自己目的化していない。このことが、著者を「暴力の否定」を目的とする人文学へと向かわせ、それが異なる 2 つの形で結実したのが『教科書』と『被害学』の二書である。『教科書』に述べられていて議論を呼んでいる多くの主張―他動詞モデル、問い不要説、「アカデミックな価値」の源泉―がなぜ出てきたのかも、〈真〉を追求しないアカデミック・ライティングという観点から立体的に理解できるようになる。さらに、人文学暴力否定論を具体化した『ナラティヴの被害学』には、〈善〉の実践理論として根本的な問題があること、そしてこれも、〈善〉についてのメタ考的察という、それ自体は〈真〉の探求が欠けていることからもたらされている。さらに、「ナラティヴの被害学」という枠組みが専らフィクションに対して適用されていること、そのこと自体が人によっては全くのナンセンスであること、そう考える者と阿部とでは〈善〉についての見解、特に善悪とフィクションの関係についての考えが異なる。最後に、阿部が二書で始めた日本の人文学の刷新は、阿部が文学・映画研究で批判しているアメリカの三位一体イデオロギー（ネオリベラリズム・ネオコロニアリズム・アメリカ例外主義）を再演し、意図せざるセルフパロディになっている。以上が本論文とその続編（山泉 2025）の主張である。

以下、2 節では、『教科書』と『被害学』を簡潔に紹介する。続いて、3 節で価値指向モデルを導入し、4 節でこの枠組みから著者阿部幸大の価値軸について検討する。これらの検討を踏まえて5 節では、『まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書』がどのような点でまったく新しいのか、筆者の答えを提示する。そして、『教科書』の主張の多くが、少なくとも著者の立場としては一貫したものとして理解できることを示す。

2. 『教科書』『被害学』の紹介

これらは、「二冊の「教科書」」（『被害学』p. 26）と阿部自身が呼ぶように、両者合わせて検討されるべきものである。本稿も両者を一貫した視座から書かれたものとして扱う。

『教科書』は、文字通り「アカデミックな文章を書くために必要なテクニックや考え方と、それらを身につけるための具体的なトレーニング方法を提示すること」(p. 7)を目的とした本である。初学者からプロフェッショナルの研究者までが読者層として考えられており、既にアカデミアの中心を担っている世代も、著者の意図する読者層に含まれている(p. 7)。これは、後述する著者の野望を考えれば自然なことである。本稿にとってより重要なのは、想定されている学問分野である。提示されている「方法論」[4]は、自然

[4] 二書の「方法論」という用語は非常に多義的で、理論的な正当化のない単なる方法・技法や特定の方法を含意しない理論的枠組みや批判的立場を意味していることが多い。これは著者固有の用語法というよりも、彼が依拠する批評理論分野において一般化して

科学・社会科学を含む分野の研究者から支持されてきたとは言うものの、筆者自身、それが通用する学問分野を正確に把握できていないことを認めている。しかし、「今後 20 年かけて日本の人文学にパラダイム・シフトを引き起こす」[5]という本書の目論見から、基本的には人文学が念頭にあると言っていいだろう。もう 1 つ重要なことは、本書は、著者がアメリカで博士号を取得する中で身につけた、アメリカにおける人文学（特にアメリカ文学・文化の研究）におけるアカデミック・ライティングのルール、価値観を提示していることである(p. 10)。著者はこれが、現在の日本の人文系アカデミアのものと異なるものであることを積極的に認めるだけでなく、「アメリカの研究スタイルを輸入することで日本の人文学の刷新を目論んでいる」(p. 11)と野望を述べている。

『教科書』は以下の構成になっている。原理編（1〜3 章）は、論文とは何かを論じる第 1 章、アーギュメントは引用と批判によってつくられるアカデミックな価値を持たなくてはならないというルールを提示する第 2 章、パラグラフをアーギュメントの単位として導入する第 3 章からなる。続く実践編（4〜7 章）は、パラグラフの構成、先行研究の引用、イントロダクション、結論を扱う。ここまでの内容については、巻末の演習編において練習問題が用意されている。そして、発展編（9〜10 章）では、論文を書く方法から目的に焦点が移る。9 章「研究と世界をつなぐ」では、「人文学の存在意義を前提しない立場」(p. 131)から、人文学の価値を問い直している。前述の人文学暴力否定論が登場するのはここにおいてである。10 章「研究と人生をつなぐ」では、「研究への内的なモチベーション」(p. 143)つまり、「「自分はこの研究をしていて正解なのだ」という根底的な「自信」のようなもの」(p. 143)を手に入れることの重要性が、著者の体験に即して論じられている。

『ナラティヴの被害学』は、著者が 2017 年から 2023 年までアメリカに留学している間に、期末レポートなどとして書いたものを元にして学術誌に掲載されるに至った論文（＋α）を著者が日本語に訳してまとめたものである（なお、博士論文はこれには含まれないとのこと）。各論文には、新たに書き下ろされたアブストラクトと解説が付されており、後者には、執筆・投稿・査読などの経緯や、著者が同書執筆時点で気付いた欠点なども書かれており、『教科書』と併せて「教科書」として供されることが意図されている(p. 25)。例外的に書き下ろされた 1 章「ナラティヴの被害学」では、昭和天皇の玉音放送の原稿を例にこの枠組みが解説され、続く論文を読むにあたっての前提知識が提供されるとともに、同書全体の核となるアーギュメント「われわれは暴力を「やつら」の手から奪還し、加害性を社会全体に再分配せねばならない」（1 章扉）が提示される。

いる広義の“methodology”の用法に由来すると考えられる。

[5] https://x.com/korpendine/status/1815713327970230452

3. 価値指向モデル

本稿が『教科書』『被害学』を読み解くために枠組みとして用いる筆者の価値指向モデルを提示しておきたい。本モデルは、自分を含む人間個人及び人間社会の行動・言動をよりよく理解するためのもので、特に観察者が「そんなことをして何になる？」と思いがちなものに対して有効である。[6] 対象となる個人・社会がどのような価値を指向していて、どのような価値を指向していないかと、価値観がどのように顕れているかに注目するため、価値指向モデルと言われる。本稿でいう価値（value）は、自己目的化された終極（telos）であり、行為の意図された目標（goal）ではない。価値は、諸目標の設定・選択・評価を方向づける基準として機能する。「自己目的化」とは、他の目的のための手段としてではなく、それ自体を追求する状態を指す。終極は複数並立し得る。

価値軸とは　（プラスの）価値とは、その実現が望まれる〈真〉〈善〉〈美〉等の特性である（それらと同じ軸で対をなす、マイナスの価値もある）。本モデルでいう価値軸とは、自己目的化された方向基準（telos）として、個人の行動を体系的に方向づける価値で、生存・繁殖という観点では説明しきれない行動をも動機づける。世界には様々な価値があり、ある価値が達成できたからといって、他の価値を達成したい欲望が満たされるわけではない。それらの価値同士は相互に代替や還元が不可能であると考えられる。以上は、ア・プリオリに決まっていることではなく、人間個人・社会の観察から分かることである。

価値の公共性　価値の実現を行ったもの以外の人にとっても価値が達成されたとみなされる場合、その価値は公共的であるという（価値が公共的であることは価値軸であることの要件ではない）。「価値があるとみなされる」という表現にあらわれているように、これは、客観的事実というよりは、ナラティヴの次元の、「〜ということになっている」話である。たとえば、私が新たな真理に到達したとき、それは、私以外の人にとっても価値があるとみなされることになっている。芸術家が人々を感動させる作品を創作した場合、たとえ絵が個人の所有物であっても、そこで実現した〈美〉の価値は他の人にとっても価値があるとみなされる（ことになっている）。しかし、同じ種類の価値であっても、実現の仕方によって公共性を持つか否かが異なることがある。例えば、どこかのモナさんが、美容に尽力して類まれな美貌の持ち主になったとしても、その〈美〉の価値は彼女だけに属し、公共性があるとはみなされない（ことになっている）。もちろん、

[6] 筆者がこのモデルを作った動機として、筆者が他者・社会をよく理解できないという認知的不協和の解消が根本の原動力にあるが、直接的には筆者が学年の初めに大学院の研究総論のリレー講義を担当するにあたって、新入院生に自分や他の研究者の研究の目指すものを認識させようと思いながら ChatGPT と相談していたところ、ChatGPT が私のアイデアを劇的に膨らませてくれたことが、本モデルの研究を始めるきっかけとなった。つまり、筆者が 0 から 1 と、9 から 10 を、ChatGPT が 1 から 9 を担当して本モデルが生まれた。

モナ・リザさんが美貌を経済的価値〈金(かね)〉に変えることは、芸術家が芸術作品を売ることと同様に可能だが、彼女を肖像画に描いた芸術家の方が、たとえその肖像画が個人蔵のものであっても、公共的価値を実現したとみなされる分だけ、この社会においては名声を得る。公共的価値として認識されたものは、制度や規範を通じて再生産されやすくなる。

公共性の広がりを捉えるにあたって、ミクロ・メソ・マクロというスケールで整理することが有効だろう。ミクロとは、活動の行い手と受容者、たとえば絵を描く人と観る人のような最小の共同体である。メソとは、価値承認の制度を担う集団で、アカデミア、画壇、教会がその例である。マクロとは価値が公共的な場合に価値を共有する社会全体のことである。ミクロ→メソ→マクロへと価値が波及する例としては、あるお笑い芸人が「笑いはもっと広く認められるべき価値がある」と感じて活動し、M-1 グランプリの創設のような制度化を行った結果、社会における〈笑〉の価値の評価が変わる、といった、価値の再主張・新興のプロセスが考えられる。逆に、マクロ→メソ→ミクロへと価値が伝播する例としては、国策（マクロ）として〈共同体〉の価値が称揚され、学校（メソ）での教育方針に反映され、それが個人（ミクロ）の価値観に作用し、学習動機や職業選択に影響する、といった、価値の規範化・内面化のプロセスが考えられる。

価値軸と考えられるものとして、以下が見つかっている（募集中）。真、善、美、便益、共感、ケア、共同体、名誉、強、笑、聖。これらは同じ程度の公共性を認められているわけではない。達成された価値を享受する共同体の広がりが異なるからである。もっとも、本稿で中心的に扱う〈真〉と〈善〉は、どちらも高い公共性が認められている。一方、〈金〉は、現代人のほぼ全ての人が承認する覇権的価値だが、公共性がない点が特徴である。たとえば、本モデルをどうにかマネタイズして金儲けしたからといって、そのことは他人にとっては価値あるものとならない。論文をトップジャーナルに掲載して承認欲求を満たしたり名声を獲得したりすることも、キャリアアップすることも、その人にとってどれだけ価値があろうとも、公共的価値の実現ではない。

全て例→	目的の方向性	価値探究活動	専門家	制度的正当化の場
真	より広い世界を深く正確に理解	科学、哲学	哲学者（除く倫理学者（除くメタ倫理学者））	学術雑誌、学会
善	世界を改善	慈善事業、倫理学	（メタ）倫理学者、慈善家、社会活動家、福祉実践者	福祉制度、倫理委員会
美	感性を深める・表現する・伝える	創作活動、美学	アーティスト、美術批評家、美学者	美術館、展覧会、芸術批評、画壇
便益	生活を便利に・快適に	ライフハック、工学	発明家、工学者、社会起業家	企業、市場、消費者評価
聖	神・超越者とつながる	宗教活動、宗教哲学	聖職者、宗教学者	教会、教団
笑	他者を楽しませる	公演、ネタ作り、笑いの哲学	お笑い芸人	寄席、M-1 グランプリ
強	能力・技術を高め、他者に勝つ	練習、試合	格闘家、棋士、格闘ゲーマー、アスリート	オリンピック、e スポーツ大会
共同体	属する共同体（家・国家・民族・家族等）の存続・繁栄	共同体を維持する・繁栄させる活動、国体論	皇族、王族、墓守	家制度、戸籍制度、天皇制

名誉	社会的承認・高評価の獲得	表彰、ランキング、SNS での「いいね」獲得	表彰者、選考委員	表彰制度、伝統的評価体系（勲章・肩書）
金（経済的価値）	交換可能な対象の量を殖やす	労働、投資、経営学、貨幣論	投資家、労働者、ファイナンシャルプランナー、経営学者	貨幣制度、資本市場、労働市場

表 1　価値軸の例

価値の内部評価基準の多様性　〈真〉〈善〉〈美〉のように価値にラベルをつけると、その内実が万人にとって共通のものであるように感じられるかもしれない。しかし、それは経験的に真ではない。まず、〈共同体〉や〈聖〉のように、対象の共同体や神がパラメータとなる価値がある。また、〈美〉について言えば、それぞれの〈美〉を追求した芸術作品が千差万別であることから、このことが見て取れる。とはいえ、個々人の〈美〉は、おそらく全くランダムに異なるわけでもない。調和・均整、独創性・新奇性、崇高さ、技術的完成度等々の美の内部評価基準があり、どの基準をどれほど重視するかによって〈美〉が異なっているという分析はある程度可能だろう。それぞれの内部評価基準には、たとえば、調和・均整を指向する古典主義のように、重視している立場と支持者が存在する。他の価値軸についても内部評価基準が複数考えられ、それぞれを重視する者が歴史に見出せる。

価値軸	内部評価基準の例
真	整合性、現実との一致、反証可能性、再現性、説明力、単純性、被覆率
善	自由、平等、最大多数の最大幸福、義務、徳、ケア
美	調和・均整、独創性・新奇性、崇高さ、技術的完成度、破壊性・脱構築性
便益	費用対効果、即時性、リスク対便益、スケーラビリティ
笑	不一致・ズレ、共同性・内輪性、逸脱性・挑発性、無害性
共同体	規模、継続性、均質性、多様性
金	名目価値、実質価値、使用価値、保存価値、投機価値

表 2　価値軸の内部評価基準

個々人の間の多様性がもっとも大きいのは〈善〉だろう。この価値は〈真〉や〈美〉が基本レベルのカテゴリー（例 机、椅子）であるとすれば、上位レベルのカテゴリー（例 家具）とみなした方が良さそうなくらいである。そもそも〈善〉とは何なのかも古代からのメタ倫理学的問いで、個々人の価値体系における〈善〉は同じではなかろう。また、〈善〉の範囲自体に多様性がある可能性が高い。この点の傍証になることとして、ハイト（2014: 第 1 章）は、「時代や文化によって異なり得る社会的な慣習」とされる範囲と「いついかなる場所でもあてはまる道徳」とされる範囲が異なることを示す調査結果を紹介している。ハイトによると、欧米の啓蒙化された個人主義的な文化では、道徳の範囲が異常に狭く、他者に危害を加えないこと、公正であること（これ自体、結果の平等の意味と、貢献に応じた報酬の比例配分の意味がある）にほぼ限られるけれども、他の文化も視野に入れて検討した結果、〈ケア／危害〉〈公正／欺瞞〉〈自由／抑圧〉〈忠誠／背信〉〈権威／転覆〉〈神聖／堕落〉という 6 つの道徳基盤を、人間が共通して持っ

ている 5 種類の味覚受容器に類するものとして見出している。ハイトの道徳とここでの〈善〉との異同は確かに問題で、全てが〈善〉に含まれるのではないかもしれないとはいえ、ハイトの研究は〈善〉の領域に文化差・個人差があることの有力な証拠になる。

さらに、〈善〉の内部評価基準も規範倫理学の中心的問いで、功利主義に代表される帰結主義、義務論、徳倫理学など様々な規範倫理学の立場がある。それぞれの立場の中でも、当然見解は様々である。これらは、基本的に万人に当てはまる普遍的な正義についての倫理学だが、それとは別の系譜に属するケア倫理学では、抽象的規範よりも個々人の間の具体的な関係性に焦点がある。ケアも正義も、それぞれ自己目的化され、他方に翻訳不可能な価値であるから、個人の内面においては、独立したものであり得る。しかし、このような多様性はありながらも、倫理学内部だけでなく言論空間においても、議論する者の間には、（お互いの〈善〉の異同に自覚的かどうかはともかく）同じ価値をめぐって争っているという感覚があるだろう。そうである限り、〈善〉は、少なくとも公共的・間主観的レベルにおいては、それ自体が自己目的化され得、互換不可能な最上位の分類単位としての価値軸として認めることができる。なお、本稿で問題にする阿部の〈善〉の価値は、研究目的である暴力の否定によって「世界を悪くなくすること」で達成しようとしているものである。個人のアカデミックなキャリア上の成功や、後述のアカデミックな「会話」を進める(p. 139)といったような、アカデミアの制度的価値の充足は〈善〉には含まれない。

ケアは、〈善〉の内部評価基準であるだけでなく、独立の価値軸なのだろうか。たとえば、たまごっちや植物の世話を好きでしている人は、〈善〉のためにやっているわけではなさそうである。そうであれば、〈ケア〉は、〈善〉とは独立した価値軸としても認める必要がある（もっとも、ケアを怠ってたまごっちが死んだり、植物が枯れたりした場合に、罪悪感を伴うのであれば、独立性は疑わしくなる）。〈共感〉も、単にドラマを見て泣くのが好きな人にとっては、他の価値軸は関係なさそうである。〈ケア〉と〈共感〉は、どちらも養育が進化的起源である可能性があるものの、独立して自己目的化するならば、いずれも別個の価値軸として認められる。

活動層：メタ的考察層、実践理論層、実践層　メタ倫理学、規範倫理学、慈善活動、これら〈善〉に関する活動の間にはどのような違いがあるのか。価値指向モデルでは、活動層が異なると考える。活動層は、a. メタ的考察層、b. 実践理論層、c. 実践層からなる。メタ的考察層は、価値そのものの本質、起源、意義、存在論的位置付け、正当化などを問う。メタ倫理学はまさにこの層における活動である。この層の活動は、基本的に哲学的な考察であり、どの価値について行っても、〈真〉の探求になるという特徴がある。実践理論層は、特定の価値がどのようなものであるか―この答えは必ずしも意識的メタ考察の結果ではない―を前提に、その価値を効率的に再現可能なやり方で実現する実践理論―いわばハウツー体系・マニュアル―を構築する層である。規範倫理学はこの

層に属する。なお、メタ的考察が体系化・理論化しても、メタ的考察層にとどまり、その理論は実践理論とは別物である。このことは、前者の音楽美学理論と後者の作曲理論が質的に全く異なるものであることから明らかだろう。実践層は、世界の中で価値を実現する具体的な行為・活動で、慈善活動、善行はこの層に属する。実践理論がメタ的考察に基づいている必要がないのと同様、特定の実践理論に基づいている必要はない。この三層はどの価値軸についてもある。たとえば、〈真〉については、メタ的考察層は科学哲学、認識論、メタ科学など、実践理論層は、ニュートン力学、文法理論など、活動層は新たな真の言明を生産する活動（たとえば、文法理論に従って文構造を記述すること）である。この三層は概念的には明確に分けられるが、価値追求活動がこれら三層の複数の層にまたがることがあるし、三層の活動は相互に影響し合うことがある。たとえば、文構造の記述という実践活動が文法理論に影響を与えることがあるし、言語とは何かというメタ的考察が文法理論はどのようなものであるはずかに影響を与えることもある（例 生成文法のミニマリスト・プログラム）。活動の主目的の点でも、文法理論の構築のために文の文法的記述をすることもあるし、文の文法的記述をするために文法理論を構築することもある。

価値軸	メタ的考察層の例	実践理論層の例	実践層の例
真	科学哲学、認識論	科学理論	実験、記述、演繹、帰納
善	メタ倫理学	規範倫理理論	社会運動、善行
美	美学	創作理論	創作活動
便益	技術哲学、科学技術社会論	UX 設計理論	製品開発、業務改善
聖	宗教哲学	神学	礼拝、巡礼
金	貨幣論	経営学、投資理論	労働、投資
笑	笑いについての哲学	ネタの作り方	漫才の上演
共同体	国家哲学、天皇制論	君主論	祭祀、婚姻、侵略
強	「強さとは何か」の考察	戦術論	練習、競技、試合

表 3　各価値軸の各層の活動

活動フェイズ：動機、表現、実現　個々の価値追求活動において、どのような価値が追求されているかを分析するにあたって、活動を動機、表現、実現の 3 フェイズで分析することが有益である。たとえば、太郎が金を稼ぎたくて数学の研究をしてミレニアム懸賞問題を解決したとする論文を書いたところ、審査員が皆、文章の上手さに感動したけれども、内容は全くのデタラメと評価されて論文は落選した、というケースを考えてみよう。

動機は、実践者本人の内面に依存するもので、公共的価値追求活動であっても、公共的でない価値が追求されていることがあり得る。このケースでも、個人の〈金（かね）〉が目指されている。個人の承認欲求の充足や認知的不協和の解消もそれ自体は公共的価値には

ならない。現実の活動の動機を突き止めるには、インタビューが一つの手段となる。

表現のフェイズでどの価値が追求されているかは、実践（この場合は論文の発表）がどの価値に紐づいたものとして社会的に認められ、語られているかによる。つまり、表現フェイズの価値は単なる個人の意図ではなく、社会的なコミュニケーションやナラティヴ、制度的な承認プロセスを通じて、間主観的・社会的に決まるのである。この場合は、数学の論文であるから、〈真〉を指向したものになる。また、このケースにおいてそうであるように、表現フェイズの価値は実践者の内面の動機と一致しなくともよく、むしろ制度的・社会的な要求・圧力に応じて決定される。したがって、表現フェイズにおいてどの価値が表現されているかは、制度やナラティヴを分析して突き止める必要がある。この制度的・社会的な要求・圧力が、価値軸分析において、キー・ファクターになっていることが多い。

実現フェイズの価値は、実践を受け取るもの（実践者本人であることもある）の視点によって主観的に（ただし受け手が複数の場合は間主観的にも）決まるもので、受け手が実践によって実際にどの価値が実現したと感じるか、解釈するかに依存する。上のケースでは、〈美〉が実現したことになる。動機フェイズと同様、どの価値が実現したかは、意識されていないことはあっても、原理的にはインタビューやアンケートによって特定可能である。社会的反応の分析によっても探ることもできるだろう。個人が従事するフェイズについても個人の好みがあり、たとえば音楽を聴くのが好きな人は実現フェイズ、演奏するのが好きな人は表現フェイズが好みということになる。

意図と表現で価値軸がズレることを「偽装」と呼ぶ。実は〈善〉の追求を意図しているのに、社会や制度の要請に応じて、たとえば学位を得るために論文を書く必要があるため、〈真〉の探求として表現する場合がこれにあたる。そのような人が特定の分野で増えれば、その分野では〈善〉の要素を論文に含めることが求められるようになるかもしれない。このような社会的制度と個人の動機の相互作用は、本稿の研究対象にも見られる。一方、表現と実現で価値軸がズレることを、「転化」と呼ぶ。たとえば、他者・社会をよりよく理解するため（〈真〉のため）に発表された本モデルの世界像が、社会の分断を改善する指針と受け取られるような場合がこれにあたる。太郎のミレニアル懸賞論文の例では、偽装と変換が起こっている。

このように、価値の探求は、実践者の意図、社会的要請、受け手の解釈のいずれにも還元されない動的プロセスとして、価値軸、活動層、活動フェイズの 3 つの次元で理解される。実現した価値は、受け手の次の価値創出活動の動機や、その人が関わる制度の形成・強化に影響を与えるというループ構造がある。上の太郎の例で言えば、審査員が自分で論文を書く際に美しく書こうとするようになるとか、論文の文章の美しさを評価する特別賞が設けられるというようなことである。

価値の癒着　個人が複数の価値を同時に追求することは普通のことである。たとえば、

論文で笑いを取ろうともしている人は、〈真〉等と同時に〈笑〉の価値も追求している。それだけでなく、個人が意義を認める複数の価値は癒着することがある。たとえば、「正しい」という表現は、〈真〉のプラスの価値の意味も〈善〉のプラスの価値の意味もあり、少なくとも現代日本語母語話者の直感としてはどちらが元とも言い難い。しかも、個々の用例では、どちらの意味か判然としないことが多い。どの意味であれ正しくない解釈を「グロテスクな解釈」と〈美〉の表現で評価する場合は、〈美〉に〈真〉and/or〈善〉が癒着している。その表現をする場合でも、美しいものが美しいから真だとはならないだろう。癒着には方向性があるのである。おそらく、その人がより重視する価値を持っていないものは、その人がその価値ほど重視しない価値も持っていないと感じられる、という方向で癒着は生じる。たとえば、以下の言明をする人は、真を善よりも重視しているということである：「私の認識では、真と善はほとんど癒着している。真に奉仕しないのは悪であると感じる」[7]。このように感じることも、比較的重視されていない〈善〉に奉仕しないものをより重視されている軸の偽と感じることを保証しない。その類に属する考えはハイト（2014: 67）が挙げていて、非論理的だが“正義心”に動機付けられたものとして急進主義的政治改革者に帰されている：「進化によって男性と女性に異なる欲望や能力が与えられたなら、そのことは多くの職業において男女平等を実現する際の妨げになるはずだ。かくして先天論によって既存の権力構造を正当化できるのなら、それは間違っているに違いない」。癒着も価値についての個人差を生んでいる。

価値の自己目的化　哲学的自然主義の立場に立つ本モデルでは、いずれの価値も、元々は適応的価値があったために生じたと考える。もちろんこれは、ア・プリオリな主張ではなく、経験的な検証を要する仮説である。たとえば、〈真〉について言うと、世界と合致した知識を持つことは、世界において行動する上で、生存・繁殖に有利である。しかし、必ずしも生存・繁殖に有利でない（場合によっては不利になる）場合にさえ価値を追求する人がいる。たとえば、〈強〉を指向して格闘技の修行をやりすぎて体を壊したり婚期を逃すような場合はそれに当てはまる。価値の自己目的化は、人によっては生まれ持ったものかもしれないが、「論文を書かなければ学位を得られない」「お年寄りには親切にしろ」「美を愛せ」といった制度、教育、規範のために生じた人もいるだろう。ここにおいては、価値の公共性が制度と自己目的化の間を媒介するものとして大きな役割を演じる。自己目的化はいずれの価値ついても起こり得る。しかし、誰もがあらゆる価値を自己目的化しているわけではない（あらゆる価値を自己目的化している人はおそらくいない）。このことは、本モデルにおいて決定的に重要である。〈真〉について言えば、純粋に知識を得たり、認識を深めるためだけに本を読む者は全人類の中でおそらく少数派であることから、このことは明らかだろう。他の価値も同様である。なお、哲学

[7] https://x.com/chan_watashi/status/1920469555609997353

的な価値論では、このような個人差は認識されていないのか、あらゆる価値が万人に等しく意義があるものであるかのような想定がある（ように筆者には感じられる）。

価値の二重の盲目性　価値の個人差は、以下の意味での価値の二重の盲目性をもたらす。第一に、ある価値を信奉する人にとってその価値に意義があることは極めて自明であり、その価値を目的としていることを意識したことがないことさえよくあるようだ。そのため、その価値に意義がないとその人を他者が説得することはほとんど不可能である。第二に、自分が意義を認めない価値に他人が意義を感じていることが見えにくい。それでも他人の行動を理解しようとした結果、自分が見えている他の価値のために行っていると誤解することが頻繁に起こる。たとえば、筆者は、教育の研究はもっぱら〈便益〉、つまり、人間が独力では容易に身に付けられない能力の習得を手助けすることの効率化のためにやっているのだろうと考えていた。しかし、本モデルに至った今や、筆者にはほとんど見えていない〈善〉や〈ケア〉の価値の方が教育研究の動機としてはどうやらメジャーなようだと考えている。他にも、論文による〈真〉の表現をしていても、動機としては主に他の価値が追求されている学問分野は少なくないだろう。そのような分野では、論文の読者の心で実現している主な価値も〈真〉ではないのかもしれない。価値は上述の通り代替不可能であり、他者が他の価値に翻訳した理解は誤解となる。たとえば、A さんが〈真〉の探求のためにやろうとしているプロジェクトの説明を、〈真〉に意義を感じない B さんが〈金〉のためにプロジェクトをやるのだと理解することがある。A さんがそれは誤解であって、〈真〉のためにやるのだといくらいっても、B さんは納得できない可能性が高い。盲目性は、癒着とともに、価値創出のプロセス全体にバイアスをかけるフィルターとして位置付けられ、どのような価値が他人に伝わるか、あるいは伝わらないかを左右する大きな要因となる。

二重の盲目性のために、意義を感じる価値が違う人の間において、すれ違い、摩擦がしばしば生じている。意義を認めていない価値の探求活動への反応の例を見てみよう。

> スペイン語、スウェーデン語なんて知って何になんの？って言われた[…][8]
>
> 「なんで古典ギリシア語やってるの？」と聞かれ、ギリシャ神話が好きで…と答えると「それ、意味っていうか…役に立つことある？他にやることないの？」と。[9]
>
> 「アラビア語なんて勉強して、商社にでも行きたいの？」[10]
>
> ヘブライ語？ギリシャ語？ラテン語？聖書を原典で読んだら何か意味あるの？就職は？お金は稼げるの？ と中世ジョージアの農民社会をジョージア語で研究している人が居酒屋で泣きながら私に言ってきました。[11]

[8] https://x.com/lotteorions31/status/1936596365829980196
[9] https://x.com/agemotEahpla/status/1936398367518831039
[10] https://x.com/Keith_Adair_Oak/status/1936350648834089101
[11] https://x.com/VCF_hastamuerte/status/1936466222104891561

これらは、「語学水差し野郎列伝」の参考資料として、募集[12]したものへの返答で、全て語学学習に対する反応であるが、語学学習の部分を他の探究活動（言語学、リコーダーの演奏、ボディビルディング等々）に入れ替えても、いかにもありそうな物言いになる。おそらく読者も、こんな言い方をしたこともされたこともあるだろう。これらの疑問は、真正の疑問であることもあるが、少なくとも修辞疑問の場合には語学学習自体に価値がないことが前提になっている。語学学習自体が自己目的化している可能性を考慮せず、語学学習をして何になる／どうする／何の役に立つ、と他の価値軸の目的が何かあることを前提とした問いになっているのである。そして、このような疑問は、後に見るように、かつて阿部幸大が人文学に対して発したものでもある。

まとめ　本モデルの構成要素がどのように相互連関し、どのように価値の実現に繋がるのかを素描しておく。人間にとって適応的な諸性質が、生物学的進化の結果、諸価値になった。それらを生まれながらに生存・繁殖に必要な限りで求める人だけでなく、生まれながらにそれらを自己目的化している人もおそらくいる。また、社会規範・制度の力で諸価値が自己目的化する人もいる（例 善行をせよという規範から〈善〉の実践が自己目的化する人）。価値が公共的であることは、社会規範・制度の力を強化する。価値の指向は個人によって様々であり、個人が私的あるいは公共的な動機から諸価値を探求している。その際に価値の公共性や価値を支える社会制度の有無がどのような表現をするかに影響を与える。諸価値の表現を受け手が自分の価値軸に従って受容することで、諸価値が実現し、続く活動の動機や社会制度に影響を与える。以上の過程の様々な局面で、価値の癒着や盲目性が作用する。なお、価値追求活動の表現物はミームと捉えられる。ミーム論はミームがどう伝わるかを説明するのに対して、価値指向モデルは何故特定のミームが生まれるのかを説明する。この観点からは、価値は、ミームが発生する際の目的的指向性と捉えられる。そして、価値の公共性は、ミームが表現者から受容者へ伝わる際に、表現者の意図したものと受容者の受け取るものの間の差異を減少させることで伝達の安定性に寄与し、その結果、ミームが複製されるときの変異を抑制すると考えられる。

4. 阿部幸大は〈真〉を指向しているか

以上で導入した価値指向モデルの観点から、阿部幸大個人はどのような価値を指向していると考えられるだろうか。『教科書』と『被害学』の分析の前に、『教科書』の枠組みと「ナラティヴの被害学」の枠組みとは独立に、本節で検討しておこう。[13] 筆者によ

[12] https://x.com/Yusuke_OYAMA_/status/1936331893278228741

[13] 筆者が価値指向モデルを考案したからといって、完全に価値中立的な言動ができるわけではないことは言うまでもない。本稿読者の理解を助けるために筆者についての自己分析を提示しておく。筆者は公共的価値の中では〈真〉を自己目的的に指向する者で

る価値指向プロファイリングでは、阿部は〈真〉に動機付けられているわけではない。

まず、彼は、学歴信仰から大学に入ったことを公言している点が注目に値する。

> わたしは高 2 の秋に大学受験を決意したが、その動機は、「どうやら尊敬できる大人は学歴が高く、本を読んでいる傾向にあるらしい」というものだった（ほんとうに想像を絶するレベルの無知だったのだ）。（ブックファースト新宿店「読書嫌いによる読書嫌いのためのリーディング・リスト、100 冊」ブックレット、以下、「100 冊」）

もちろん、このような動機は珍しいものではないが、大学入学の動機が〈真〉の探求のためではなかったことは確かなようだ。阿部はその後、2 年浪人して東京大学文化三類に合格し、2 年次半ばの進学振り分けの結果、文学部の現代文芸論研究室に進学した。[14] 〈真〉を指向していないのであれば、この選択は正解だったのかもしれない。後述するように文学は、必ずしも〈真〉との関係が、他の多くの学問のように極めて密接であるわけではないからである。しかし、阿部は、読書が嫌いで文学そのものへの興味がないとまで述べている（「100 冊」）。それでも文学を専攻することにしたのは、学部 2 年次に受講した柴田元幸の英語短編小説を読む授業で、「この小説について一番面白いこと言ったやつが勝ちゲーム」にめちゃくちゃハマったからとのことである。[15] これも〈真〉の探求を目的とした活動ではなさそうだ。阿部はそのまま現代文芸論研究室の修士課程に進み、柴田元幸を指導教員に、“Development of Characters in Thomas Pynchon’s Novels”という修士論文を書く。大学院博士課程は、指導教員が退職したためか、東京大学の英語英米文学研究室に進学した後、ニューヨーク州立大学ビンガムトン校比較文学科博士課程に進学した。

相当の労力を費やして博士課程に留学までしたのに、この時点では、研究者になることを決めておらず、留学中に決めた（「100 冊」）ということも彼の価値を探る上で注目に値する。〈真〉を指向して大学に入学するような人であれば、もっと早くに研究者を志しているのが普通だと考えられるからである。〈真〉を目指さない人文学暴力否定論に到達したのは、次の引用（『教科書』p. 138）にあるように留学終盤とのことなので、研究者になることを決めたのと同時期のことだと考えられる。

> 人文学の究極目的のひとつは、暴力の否定である。あるいは暴力を肯定するなんらかのロジックなりナラティヴなりを批判することである。たとえば人文学の一領域

あり、他には〈美〉と〈便益〉にもおそらく人並み以上の興味がある。趣味として〈強〉も最近は嗜んでいるが公共性はない。他の価値については、人並み未満であるように感じる。

[14] 阿部幸大の経歴については主に以下を参照した：
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%98%BF%E9%83%A8%E5%B9%B8%E5%A4%A7

[15] https://book.asahi.com/article/15620332

> である文学研究なら、その末端で遂行される作品を面白く鋭くアカデミックに読むという行為は、たとえば――あくまでたとえば――こうした究極目的のひとつに奉仕するのでなくてはならない。これが、わたしが院生時代の終盤に到達した結論だった。

ここの「奉仕」という言葉には、文学研究が元来指向する価値から〈善〉へのシフトが示唆される。阿部はこの結論に達してから、戦争小説や戦争映画の作品論として作品を分析して褒めることを止めて、「権力批判、とりわけ国家による戦争行為と、戦争を正当化する言説の批判にシフト」し、「軍事面において保守的な作家・作品を批判することで建設的な議論を提示するというスタイル」を確立した(p. 149)。注目すべきは、このシフトが純粋に自発的なものではなく、「反骨精神のようなスピリットが自分のパワーの源泉であることを発見した結果として、それを外部コンサルとしての自分が研究者としての自分に「おまえ批判するスタイルのほうが合ってると思うよ」とアドバイスとして与えるようなかたちで、意識的に引き起こしたシフトだった」(p. 149)ということである。

この意識的なシフトは、阿部が挙げている次の二分法の観点から興味深い。阿部は、論文が書けるようになるルートとして以下の 2 つを挙げている。1 つは、「自分の人生とかかわるような問いやテーマを深く深く追求し、その先に論文という表現形態が開けてくるようなパターン」、もう 1 つは、「論文執筆を仕事として捉え、職人のように研究の諸技術を磨いてゆくパターン」[16]である。反骨精神を力の源とする阿部は前者の典型例であるように思うかもしれない。しかし、自分では、このブログ引用部の直後で自身を後者に分類している。これとは異なるが似たところのある分類は以下のように『教科書』にも見られる。

> あなたがすでに現在なんらかのトピックにコミットしているとして、そのトピックとあなたのつながりは、たとえば「たまたま授業で扱われていたから」といったものから、セクシュアル・マイノリティの当事者でクィア・スタディーズにコミットしているといったアイデンティティにかかわる必然性の高いものまで、さまざまであるだろう。
>
> 後者は、個人的な人生の問題と研究トピックが明示的に連続しているケースだ。このようなケースは、研究の継続的な遂行という目的に絞っていえば、とても強力である。なぜか。それは、あなたはすでに研究を遂行するための内的なモチベーションと目的意識をもっているからだ。あなたにとっての研究の究極目的は、おそらく一生ブレることがないだろう。それは、この場合、セクシュアリティにまつわる差別を批判し、それを撲滅することである。

[16] https://abc-kd.hatenablog.com/entry/2022/07/14/182415

> このタイプではすでに、世界と研究と人生がうまくリンクしている。そもそも世界のなかに生きる自分の人生の問題から派生して研究の問題が発生しているのだから当然だ。その場合、自分がすでに持っている興味を磨いてゆくためのプラクティスを提供する『研究の出発点』は、とても役に立ってくれるだろう。(pp. 145-146)

阿部は、ここでも自分を後者の人生と研究主題が密接なタイプには分類せず、「なんとなく選んでなんとなくやっているというケース」に分類している。彼の研究は、テーマに動機付けられているわけではないのである。ここからわかることは、上述の意識的スタイルシフトは、阿部が実際にはこのタイプではないにも関わらず、セクシュアリティに関する差別を批判・撲滅しようと研究する性的少数者のような研究者に倣って、敢えて自分のスピリットを見出して暴力を否定する研究をするようにした、ということなのである。筆者にとって疑問であるのは、研究テーマと研究者の人生とが、どちらからであれ、なぜ繋がらなければならないのかということである。〈真〉の探求に駆動されている人は、自分の能力の範囲でできるかぎり一般性の高い真理を自ずと探求しようとする傾向がある。「まずみんな数学者を目指し、ダメなら次は物理学者を目指す」ものだと研究仲間から最近聞き、ナイーブだとは感じつつも、筆者も昔は同じことを考えていたことを思い出した。しかし、〈真〉の価値が自己目的化していない場合、生存・繁殖（≒人生）に必要なだけしか〈真〉を求めないため、人生にある何らかの価値を延長していって研究につなぐという回路が「テーマと人生を繋ぐ」ということなのだと筆者は想像している。

以上、阿部のこれまでの語りには、自身についてであれ、他人についてであれ、〈真〉に駆動されている人間像が皆無である。次のツイートも同様である。

> 大学の先生がなかなか学問について身も蓋もないアドバイスをくれないのは、ひとつにはその能力がないからだが、ひとつには、カッコ悪いからである。自分の活動の背後には高尚な原動力があると思わせておきたい——あるいは、自分がそう信じていたいのだ。[17]

「高尚な原動力」というのは、おそらく〈真〉の探求のようなものだろう。阿部にはそれが見えないようである。

5. まったく〈真〉を指向しないアカデミック・ライティングの教科書

本節では、『教科書』がこれまでのアカデミック・ライティングの教科書と際立った違いを見せている点を指摘し、そのいずれもが〈真〉の指向がないことと密接な関わりを持つことを論じる。

5.1 研究参考書としての『教科書』

[17] https://x.com/korpendine/status/1940000233288839517

『教科書』がアカデミック・ライティングの教科書として「まったく新しい」ことの１つの側面は、大学生以上を読者層としているにも関わらず、大学の教科書のようなものとしてではなく、受験参考書と同様の「研究参考書」[18]として書かれているところである。これは単なる文体やスタイルの問題ではなく、内容に関するものであり、類書との価値軸の根本的な違い、つまり〈真〉の欠如に由来するものである。

まず阿部が、受験参考書に特別な思いを持っていることを示しておく。著者は、参考書マニアを自称しており[19]、受験参考書 4 冊を監修している（『暗殺教室 殺たん』シリーズ、集英社）。さらに、著者による、東京大学本郷キャンパス生協書籍部の選書フェアでも参考書を複数選び、「わたしの研究というか、勉強というか、全知的活動の出発点にあるのは学習参考書なのだ」（本郷書籍部の選書フェア: 10）とまで言っている。後述の受験参考書の性格を考えると、彼の知的活動は、〈真〉の探求を動機として始まったのではなさそうである。

そのフェアにおいて、注目に値するのは、『メンタル・コーパス』という言語学書（テイラー 2012）に寄せた以下の推薦文である。

> 生成文法に触れたら、つづいて認知言語学を覗いてみるべきだ。いずれも人間が母語を自在に使いこなせるメカニズムの解明を目指す分野だが、認知文法はわれわれの語学学習の態度に変革をせまる点がすごい。単語の丸暗記じゃダメだと多くの人は聞いたり感じたりしたことがあると思うが、ではなにがダメなのか、なにを覚えればよいのか。それは「スキーマ」である、というのが本書の主張だが、その概念に触れた瞬間、あなたの語学学習は立体化しはじめることになるだろう。（下線引用者、以下同様）

「コーパス」という語は、英語学習の文脈で一般人も耳にすることが多いかもしれないが、メンタル・コーパスは、言語使用者の頭にある比喩的なものである。そもそも『メンタル・コーパス』は、個人的便益に属する語学学習[20]のための本ではない。〈真〉の主張をしている言語学書である。それでも著者は、〈真〉を追求する人ではないからか、個人的便益について主張していると読み取ってしまっている。[21]専門的には、そもそも、

---

[18] この言葉は著者のツイートにある https://x.com/korpendine/status/1870111430638481579

[19] https://x.com/korpendine/status/1263688548085116929

[20] 外国語学部は中心的授業で公共的価値を追求していないという点で特異な学部である。外国語学習を手段とした異文化の理解（〈真〉〈共感〉）といったナラティヴがあるのなら、そうではないと言えるかもしれない。

[21] このような、個人が強く持っている別の価値軸で受け取ってしまうことは、我々が気付いていないだけで実際にはどうやらよくあることである。たとえば、筆者は、野矢（2018）は〈真〉を効率よく達成するための〈便益〉の書だと思っていたが、〈真〉・〈善〉を指向し〈便益〉指向はないと自己分析する別の人は、この本を〈善〉の実践と受け取っていた。筆者がその見解を聞いてから、同書最終章をしめくくる漫画―結局のところ、国語力は愛。言葉の力をきたえて分かり合えることが増えたら、世界はその分すてきに

生成文法は「母語を自在に使いこなせるメカニズムの解明」を行っていない（なぜなら、そのメカニズムは、生成文法の扱っていない言語運用の話だから）。そのため、〈真〉についての理解も問題がある（田中太一、p.c.）。

このように受験参考書を偏愛する著者は、「わたしが人生でやってきたことは、ドラム、受験勉強、研究の 3 つで、そのすべてを同じ方法で攻略してきた」（「100 冊」）と述べている。ここでの受験勉強は、大学受験のことが念頭にあることはほぼ確実である。[22] 研究の攻略とはなんだろうか。大学受験の攻略はわかりやすい。大学に合格することである。このアナロジーで考えると、「研究の攻略」とは、おそらく〈真〉の達成ではなく、論文が査読を通過し、ジャーナルに掲載されることである。この文脈での研究において〈真〉は自己目的化されず、外部の審級（査読者）に認められることが目的となっている。実際、「わたしたちは最終的に、顔の見えない査読者から OK をもらえるような論文を書く必要がある」(p. 30)とする『教科書』は、常に査読者の見えざる目を意識している。この点でも『教科書』は、受験参考書と同様の精神で、研究参考書として書かれていると言える。受験参考書の精神とは、合格という個人の利益を〈真〉よりも優先することである。大昔の受験参考書は、大学教員が書くことも多く、その教科で学ぶ知識・考え方といった〈真〉の面に重きを置いていたものが多かったが、現代の受験参考書は、大部分が予備校講師によって書かれ、その性格は大きく後退している。そして、同書は受験参考書の精神で書かれたからこそ、論文執筆について極めて具体的なノウハウに満ち、明確な正解を示す。たとえば、論文掲載を目指しているジャーナルに掲載されたモデル論文として、近年その媒体に複数論文を載せている生産的な若手研究者によるものを選び、そのパラグラフの平均字数を、「「参考にする」程度ではなく、厳密なルールとして設定することを提案」(p. 64)している。引用文献をどのくらい挙げるべきかも同様にして決まる。全体として同書は、「〈真〉に駆動されるとはどういうことか」を知らない人が制度的に〈真〉の探求の表現が求められる場面で高く評価される振る舞いの方法を指南している。つまり、研究自体の最終的価値抜きに、「アカデミアのゲームに勝つ」方法を学ぶ参考書になっているのである。もっとも、〈真〉に意義を感じていない人が〈真〉の制度的表現としての論文が書けるようになるには、このようにアカデミック・ライティングを目に見える形の部分から捉えることが最短の経路である可能性はある。

5.2 論文の定義を主張

なるでしょ？ 愛の力で世界平和！と唱道する―を読み返すと、〈善〉の実践という側面も納得できた。

[22] 「これも何度か書いてるが、俺にとっては東大に入ってから研究者として成功するよりも、釧路の高校から東大に入るほうがずっと難しかった。」（https://x.com/korpendine/status/1870300893549335010）と阿部はツイートしている。

以上の『教科書』の全体的な特徴付けに続いて、各論に移る。『教科書』第一章は、次のように始まる。

> 論文とはなにか。この問いに、ひとまずシンプルな答えを与えることからはじめよう。
>
> **論文とは、ある主張を提示し、その主張が正しいことを論証する文章である。**
>
> (p. 15、太字は原文)

この「主張」は「アーギュメント」と呼ばれ、「論文の核となる主張内容を一文で表したテーゼ」(p. 16)とされる。そして、テーゼとは「論証が必要な主張」と定義される。さて、この章は、次のように終わる(p. 27)。

> 本章は冒頭で「論文とはなにか」と問い、そして「論文とは、ある主張を提示し、その主張が正しいことを論証する文章である」と書いた。そう、これがまさしく本書のアーギュメントなのだ。[…]論文とは、アーギュメントを論証する文章である。いまあなたには、この定義の意味が、本章の冒頭とはまったく違って見えているはずだ。

何かがおかしくないだろうか。「論文とは、ある主張を提示し、その主張が正しいことを論証する文章である」≒「論文とは、アーギュメントを論証する文章である」、これらは、論文の定義であると同時に、『教科書』のアーギュメントとされているのである。次の章でも、「わたしは「わたしの論文の定義は戸田山の定義と違います」と主張」したことに触れている(p. 34)。

それを論文の定義とするのは著者の自由であるからよいとしても、これが同時にアーギュメントであると言えるのか。この本の基準に照らしてみよう。アーギュメントは論証が必要であり、「論証が必要」ということの意味は、「本当にそうなのか？ じゃあ論証してみろ」といった反応を読者から引き出すことであるとされる(p. 21)。同時に、そのような反応を引き出せるかどうか、つまり「反論可能性の有無」は、「その言明がアーギュメントであるかどうかを測定する重要な指標」とされている(p. 21)。この辺りがアカデミック・ライティングの『教科書』として最も重要な部分だが、問題が多い。最も大きな問題は、「論文とは、アーギュメントを論証する文章である」と定義されても、定義である以上、「本当にそうなのか？ じゃあ論証してみろ」とはならないことである。[23] 著者はアーギュメントが「「論証を要求する」という側面を確実に満たすためのもっともシンプルな方法」として、「アーギュメントを「この論文は〜を示す」という構文で書くことである」とも述べている(p. 20)。それに倣って書いてみると、「この本は、論文とは、アーギュメントを論証する文章であることを示す」となるが、「論文とは、ア

[23] それ以外に、(「論証が必要」ということの）意味と指標が同じであることも引っかかる。より大きな問題が「反論可能性」の概念についてあり、5.5 で論じる。

ーギュメントを論証する文章である」は定義である以上、論証の対象にはならない。そもそも定義（stipulative definition、Gupta and Mackereth 2023）とは、「この議論ではこういう意味でこの語を使う」という基盤形成のための宣言であるから、「それを論証せよ」と言う人は定義が何であるかが分かっていない者であり、話にならないのである。その定義こそが本書のアーギュメントだと阿部は主張している。したがって、『教科書』は、ハウツーとしていかに有用な知見を含んでいるとしても、〈真〉の面からは、全体として論理的に破綻していると言わざるをえない。この点も、本書に〈真〉が欠如していることの現れである。

なお、この「定義」は、規約的定義ではなく、説得的定義であるからアーギュメントとして問題ないという反論があり得る（田中太一、p.c.）。まず、説得的定義の提唱者 Charles L. Stevenson による「教養」の説得的定義の例（下線部）を挙げる。「彼」には教養がないという人への反論である。

> いや違う。あなたは教養の上っ面、中身の空っぽな単なる見せかけだけを強調しているのだ。「教養」という言葉の正しくて完全な意味は、「創造力豊かな感受性」や「独創性」ということだ。彼はそれをもっている。だから、きわめて控え目に言っても、彼は、教育程度においてまさっているわれわれの多くよりはるかに教養があると言えるだろう。（Stevenson 1948: 211、香西 2016: 26 による訳）

阿部の論文の定義は説得的定義であるという反論は以下の点で成り立たない。第一に、説得的定義は、上の例のように、問題の語「教養」や「論文」の既存の意味が読者と共有されていることを前提に、問題の概念の、聞き手が注目していない側面に焦点を当て、そこを本質として打ち出す技法である。しかし、阿部の論文の定義は、アカデミック・ライティングの入門書の第 1 章冒頭で提示されたものである。この段階で『教科書』の中心的読者層である初学者が、「論文」の既存の意味を共有しているとは想定できない。もちろん、論文とは学者が書く文章であるというようなことは初学者も知っていると想定可能だが、ここで知っているかどうかが問題となっているのは、論文の書き手として知っておくべき内容的な要件である。したがって、阿部の定義は説得的定義の前提を満たしていない。第二に、説得的定義は、上の例のように、他の結論（上の例では、彼は教養があるということ）を論証するために持ち出されるものである。それに対し阿部は、論文の「定義」を本書のアーギュメント、つまり論証されるべきものとして提示している。この点でも、阿部の定義を説得的定義として位置付けることはできない。もし、阿部の定義が説得的定義だとしたら、「定義」というアカデミック・ライティングにおいて非常に重要な語を、本書の最重要部分でことわりなく非標準的な意味で使っていることになり、それはそれで大きな問題となろう。

5.3 問いの軽視

以下 3 つの節の論点は、社会学者の太郎丸博による『教科書』の書評[24]にもあるもので、いずれも同書が〈真〉を指向していないことを考慮に入れるとよく理解できる。なお、太郎丸の書評は、同書が論文の書き方を非常に具体的にハウツー化していることは高く評価している。一方で、以下で取り上げるような疑問を呈しており、〈真〉を追求している学者からこの本がどう見えるかを示す好例となっている。適宜太郎丸の見解も紹介していく。

阿部は、自身の論文観が現在日本で流通しているもの―「問いをたてて答えるというフォーマットで書かれた文章」と“定義”される―と大きく異なることを自覚しており、最も重要な違いは、彼の見解では論文に問いが必要ないとする点であるとする(p. 31)。「問いとは主張内容から逆算していつでも形式的に生成可能なものにすぎない。ここで問いの有無は、あくまでレトリックと効果の問題にすぎないのだ」(p. 32)と阿部は主張する。そこにある例を挙げると、「本書では論文を定義する。論文とはアーギュメントを論証する文章である」という主張から、論文とはなにか？という問いが逆算できるということである。もちろん、ここで不要とされる「問い」とは、単に論文においてリサーチ・クエスチョンを表した疑問文と解釈すべきではないだろう。その有無はレトリックの問題であるし、阿部が p. 31 で引用し、批判している 2 つの論文の定義―「論文とは(1) 問いがあり、(2) それへの答えを主張し、(3) その主張を論証する文章だ」（戸田山 2022: 15）および、河野（2015: 33）の「「問い―答え」形式を持たない文章表現は論文ではありません」―は、どちらも「問い」を疑問文と解釈する必要がないからである。阿部は、論文は、（リサーチ・クエスチョンを表す疑問文ではなく論文が答えを与えるものとしての）問いがなくてもまったく問題なく成立すると主張する。むしろ、論文が成立するためには、逆算された問い―阿部によると必要ない―に対する「答え」にあたるものがアーギュメントになっていること、及び、そのアーギュメントにアカデミックな価値（後述）があることが必要と説かれる。[25]

これに対して太郎丸は、書評の「論文に必要なのは問いではなくアーギュメントか？」という節で、論文に問いが必要ないという阿部の見解を「確かにその通りだと思う」と認め、古い論文指南書（エーコ 1991、梅棹 1969、川喜多 1968、木下 1981 が挙げられ

[24] https://sociology.jugem.jp/?eid=1062

[25] 阿部曰く、「この「論文には問いが必要である」という論文理解には、じつは二次的な弊害がある。それは論文の成立における十分条件であるという誤解を招いてしまうということだ。じっさいには、第一にその「答え」がアーギュメントと呼べる主張になっており、第二にそのアーギュメントにアカデミックな価値がないかぎり、論文は論文として成立しない。」（p. 32）このことを述べる以上の部分において、「じっさいには」以下は、論文成立の十分条件が述べられていることが期待されるものの、「～がないかぎり、論文は論文として成立しない」とあることから、この 2 点は必要条件であると考えられる。

ている）には問いの設定を必須条件とする記述があった記憶は全くないと振り返っている。しかし、太郎丸は、「やはりほとんどの場合、「問い」はあったほうがよいだろう」と、問いを立てることの重要性をより強調し、近年、リサーチ・クエスチョンと呼ばれる「問い」が重視されるようになったのは、研究・アーギュメントの価値を明示する有効な手段だからであるとする。ただし、太郎丸の重点は問いを提示することにあり、有無が問題とされている「問い」は、どちらかというと、上述の疑問文の意味合いが強い。

〈真〉指向の有無―「真理」の探求を社会学の目的とする太郎丸に有って阿部には無いもの―、これが論文にとっての問いの重要性を左右する。まず、どちらの立場にとっても、問いがレトリックとして有用であることは間違いない。それは何故か？――と問いを目にしただけで、そこに意識の焦点が絞られることを読者は感じるだろう。これが簡単な答えである。この点では、指向する価値が〈真〉であるか、暴力の否定のような〈善〉であるかは関係ない。どちらであっても、論文執筆段階においては、問いを明示しなくとも論文は書ける。しかし、〈真〉の探求において、問いは、本質的な存在意義を有している。論文の問いは、その論文の研究が行われる以前の（論文筆者が代表する人類の）知識状態に対応する。それは、命題関数（例 [潜伏疑問名詞句を項に取れる述語の性質は x だ]）の形で表現できるようなものである。当然ながら、この段階では、問いの答えは確定していない状況にある。その命題関数を真にする値が何であるかを論文で著すことで、人類の知識の進歩が公共的なものになる。したがって、〈真〉の探求においては、問いは価値の実現に論理的に先行していなければならないのである。しかし、阿部は、問いが論文に不要だと述べる。何故かというと、阿部の論文の究極の主張は最初から暴力の否定と決まっているから、問いが先立つことはないからだろう。

> わたしは、なにかをうまく分析できそうなときではなく、みずからの考えがなんらかの意味で暴力の否定をうみだす重要な主張に結実しつつあると信じるときに、論文を書く。（『被害学』p. 20）

答えの定まっていない問いから出発する探究は、結論が未確定であり、暴力の否定という結論が既定路線である阿部の探究とは異質なものである。実際に、阿部が『教科書』で例として挙げるアーギュメント「『アンパンマン』においては、男性中心主義的な物語が女性キャラクターを排除している」(p. 24)からは、まともなリサーチ・クエスチョンたり得る問いを逆算で作ることが難しい：『アンパンマン』においては、何が女性キャラクターを排除しているのか？／男性中心主義的な物語が何を排除しているのか？／男性中心主義的な物語が女性キャラクターをどうしているのか？　これらのいずれについても、フェミニズム批評ならば、作品を読み込まなくとも大体の答えは自明だろう。阿部の研究が、この例以外も特定の善を前提とした〈善〉の実践層における活動であることからの帰結である。

『教科書』が想定する論文で行っていることは、おそらく多くの読者が想定している

〈真〉の探求とは大きく異なるものであることが明らかになった。〈真〉の探究では、問いを立てて、未知の答えにたどり着く論証過程を重視する。前提と論証が妥当であれば、答えは予想と違っても受け入れざるを得ない。答えが予想と違えば、当然ながら、予想は上書きされる。一方、〈善〉の実践では、すでにある信念（例 暴力反対）を読者に共有させるのが目的である。論証はその信念の正当化のことである。だから、基本的に後付けのものであり、あえて問いから始める必要はない。論証の結果、暴力の否定が出てこなかったら、阿部の場合には文字通り論文にならない。むしろ、既定の結論から逆算していかにうまく言語化・表現・説得するかに注力することになる。『教科書』の論文観は一見、「問いではなくアーギュメントから始める」という点で新しいように見えるものの、これは〈善〉（阿部の場合は、暴力の否定）という価値軸に依存した実践的最適化であって、〈真〉の探求成果を論文に書く場合には、彼我の違いを認識せずに鵜呑みにできるものではない。

5.4 「アカデミックな価値」とは何か

アカデミックな価値とその源泉についても、阿部と太郎丸の見解は対立している。阿部にとっての「アカデミックな価値」には、本書の研究参考書(5.1)としての性格が強く現れていることを、太郎丸の見解と対比しつつ論じる。阿部は、論文のアーギュメントに求められる価値とは、アカデミックな価値しかないと主張する。そして、そのアカデミックな価値は、反論可能なアーギュメントがアカデミックな「会話」を進めたときに発生するとされる。「会話」とは、Belcher（2019: 66）の比喩で、「特定のトピックに興味をもつ論者たちが現在どのようなことを話していて、現状どんなコンセンサスが取れているかという、トピックの周辺をとりまく意見の総体のようなもの」(p. 33)のことであるとされる。会話を進めるために、先行研究を引用し、批判する必要が出てくる。このポイントは「アカデミックな価値は引用と批判によってつくられる」(p. 34)と「法則化」してまとめられている。

一方、太郎丸は、「アカデミックな価値は批判によって作られるか」というセクションにおいて、アカデミックな価値を作るにあたり、先行研究の前提・論証・結論の問題を指摘するような批判は必須ではない旨を述べている。[26] なお、筆者もこの点に同意し、

[26] 太郎丸は、「阿部のように「批判」を広い意味でとらえればそのとおりだろうが、常識的な意味で考えれば批判しなくてもアカデミックな価値は作れる」と述べている。広い意味での批判とは、次の文にある、「これまでの研究では扱われていない問題があることを指摘すること」のようだが、『教科書』の「批判」の用例を検索する限りでは、そのような意味での批判はなかった。もっとも、太郎丸は続いて、「批判が大事。それなら、先行研究のおかしな点を探して批判すれば立派な論文になる。む、ここに西洋中心主義的な記述がある。これを批判すればいい！」みたいな論文は勘弁してほしいと、このような「批判」を批判している。阿部はアンパンマンの例や自身の論文において、こう描写され得るようなことをフィクションについて書いているので、そのようなもの

論文が〈真〉の探求結果の報告であれば、新たな問題を発見し、それの答えが得られたことを報告する場合には、先行研究の批判は必要ないと考える。また、前述の通り、太郎丸は「面白さ」をもアカデミックな価値基準として認めている。面白いという情感は、新しい知識がもたらされたときに生じるものであり、〈真〉と強く結びついている。太郎丸は、書評の「論文に必要なのは問いではなくアーギュメントか？」という節でも、問い・アーギュメント・研究の価値について論じているが、それは阿部の「アカデミックな価値」（後述）とは異なる。太郎丸にとってのアカデミックな価値とは、主に 2 つあり、1 つは、本稿の〈真〉にあたるもの―社会学者にとっては、「社会の実態や仕組み、成り立ちを知ること」―である。もう 1 つは、多くの人の関心を引くことであり、「なぜ少子化が起きているのか」という問題は、多くの研究者・一般人が関心をもつ問題であることから、この問題にアプローチする研究は価値があるとアピールできるという旨を述べている。

阿部は、何かの実態や仕組み、成り立ちを知るといった〈真〉についての価値については全く言及していない。「面白さ」については、以下で見るように、アカデミックな価値としては明示的に否定している(p. 33)。そして、アカデミックな価値は、「先行研究を引用し、自分のアーギュメントが現行の「会話」を更新するものであることを示すことによって、自分でつくるものである」(p. 33)と続けて主張する。このようなアカデミックな価値については太郎丸も言及しているが、批判がなくともアカデミックな価値が作れるとも述べている点で、両者は見解を異にする。阿部は、会話を更新するのではなく、自らが会話を始めることについては、「誰も話していないトピックについていきなりアーギュメントを提出してもダメだ。アーギュメントは、すでに交わされている「会話」に参入するものでなくてはならない」(p. 33)と断言している。それに続けてその理由を阿部は以下の 3 段落に渡って論じている。

> なぜなのか。これは、論文における先行研究の引用という慣習の根幹にかかわっている。[…]それが不可欠である本質的な理由は、他人の意見を引用しないかぎり自分のアーギュメントにアカデミックな価値があるということを示すことが構造的に不可能であるためだ。
>
> あなたは自分の意見に価値をもたせるために、だしぬけに奇抜なことを言っても無駄である。それは面白そうではあっても客観的には価値評価できない意見として、宙に浮いてしまうのだ。あなたは誰が読んでも「これにはアカデミックな価値があるらしい」と判断できる形式で自分のアーギュメントを表現する必要がある。そのためには、現行の「会話」を整理することでコンテクストを用意し、それと自分のアーギュメントとの関係を述べなくてはならない。

が太郎丸の念頭にあったのかもしれない。

> アカデミックな価値は、多くの読者が「面白い」と思ったときに発生するのではない。それは、先行研究を引用し、自分のアーギュメントが現行の「会話」を更新するものであることを示すことによって、自分でつくるものである。それを評者が間違いなく把握できるように書くことは、著者の責任なのだ。(p. 33)

いくら多言が費やされていても、筆者には、会話を進める以外の方法が原理的に不可能であるということが論証されているとは思えないが、「会話」を始めることや「面白さ」がアカデミックな価値を生み出さない、と理由はともかく阿部が考えていることは明らかである。

なぜ阿部は、会話を始めることでアカデミックな価値を生み出すことができないと考えるのか、そのヒントは「面白さ」についての記述にある。「面白さ」についても、上の三段落では、多くの読者が「面白い」と思ったときにアカデミックな価値が発生しないのはなぜかが説明されていない。阿部は、面白さ自体が価値であることは違いないと認めつつも、面白いか陳腐かの判断は、「評者がもっている知識網や興味に左右される主観的なもの」（p. 30）として、重視しないどころか、アーギュメントの良し悪しの判断基準として使うべきではないと書いている。そして、その理由は、「わたしたちは最終的に、顔の見えない査読者から OK をもらえるような論文を書く必要がある」(p.30) からであるとされている。ここで本書が「研究参考書」であることを思い出す必要がある。前述の通り、『教科書』にとっての「研究の攻略」とは、論文が試験を受けて第一志望に合格すること、つまり、査読を通過しジャーナルに掲載されることである。大学受験の採点が匿名の採点官によって行われるのと同様、ほぼ全てのトップジャーナルの査読は匿名で、つまり「顔の見えない査読者」によって行われる。上に引用したように阿部が「面白いか陳腐かの判断」と言ったときに判断主体として念頭にあるのは、論文の筆者自身ではなく、誰かわからない査読者なのである。そんな顔の見えない「評者がもっている知識網や興味に左右される主観的なもの」でしかない「面白さ」はいくらあっても論文を確実に合格させる力を与えないため、一顧だにされないのである。合格第一の受験勉強に面白さは必要ない。

つまり、阿部の視座において、論文・アーギュメントの「アカデミックな価値」というのは、他者依存的な制度的正当化のみに依拠するもので、論文の筆者は、採点に一切口出しできない受験生のように価値評価の主体性を全く持たない。[27] トップジャーナルがトップたる所以も、掲載論文の引用頻度にあるとし、その編集者が掲載したい論文

[27] 阿部は、日本のジャーナルは教員が院生を評価する教育の場であるのに対して、英語圏のジャーナルは研究の場で、「日本の査読が一方向的な「評価」なら、英語圏の R&R[Revise & Resubmit]は「対話」であると言える」（https://gakuiryugaku.net/seminar/4617）と述べていることから、この点に関して、少なくとも英語圏のトップジャーナルについては、幾分異なる見解を持っているのかもしれない。

の指標も、対外的な影響力―対象読者層の広さと被引用可能性の高さ―に他ならないとする(p. 136)。さらに阿部は、人文学者の論文を書く能力の有無についても、「何を書いても全国誌に載ることが人文学の論文を書けることの最低ライン」と仮定して話をしており、ここでも実力評価を査読者に委ねている。[28] 以上の徹頭徹尾他者に依存した「アカデミックな価値」の見方は、社会構築主義的と言えないこともないかもしれないが、〈真〉の探究という視座からは、自律性のない非常に制限された理解に見える。そもそも、論文は、査読のあるジャーナルに掲載され、ジャーナルのインパクト・ファクターに比例した価値を持つ研究者の業績としてカウントされるためにしか書かれないのだろうか？ 探求者の頭にある問いの答えがわかり、新たな真の命題が生まれ、人類が新たな知識を獲得した――これを記録することを第一の目的として論文が書かれるとき、見えない査読者の目を気にする必要はなかろう。阿部幸大の提示する「アカデミックな価値」は、〈真〉の探究を目的とした学問におけるアカデミックな価値とは根本的に異質なものである。

5.5 アーギュメントの強弱は何を意味し、他動詞モデルとどう関わるか

『教科書』によると、論文を書くプロセスとして、トピックや観察を、論証が要求されるような形式の主張「アーギュメント」へと書き換えた後、それを強化する（＝「鍛える」）というプロセスが必要とされる。ここで、「アーギュメントの強さ」という概念が導入されていて、これについて阿部は、『教科書』以外の場で、「アーギュメントが強いほど論証が難しくなり、弱いほど論証が簡単になります」[29]と述べている。しかし、後述するようにこれを『教科書』の解釈にそのまま用いることはできないため、強弱の内実を本節で検討することにする。さて、アーギュメントを鍛える（＝強くする）方法として『教科書』で大々的に推奨されているのは、「A が B を V する」という他動詞の文「他動詞モデル」に落とし込むという方法である。例としては、「『アンパンマン』においては、アンパンマンとばいきんまんという男同士の物語ばかりが注目されている。」(p. 23)という観察がまずあり、それを「『アンパンマン』は男性キャラクターばかりを描く」(p. 23)、そして「『アンパンマン』においては、アンパンマンとばいきんまんという男同士の物語が、女性キャラクターを周縁に追いやっている。」(p. 24)、さらには、「『アンパンマン』においては、アンパンマンとばいきんまんという男同士の物語が、女性キャラクターを排除している。」(p. 24)と表現されるに至り、アーギュメントが鍛えられて

---

[28] 2025 年 7 月 17 日 YouTube ライブ、https://www.youtube.com/watch?v=TWiPAinf9eI
また、次の阿部のツイートでは、学術以外についても、自己評価より他者評価を優先する価値観が現れている。“ナショナリストって「日本すごい→日本人の自分もすごい」という回路で自己肯定したい人たちなのだと思うんだけど、南京でも慰安婦でもいいが、過去の過ちって認めたほうが株上がらね？シンプルにそう思うんだけど。そうやって株を上げたくはないのかな。”（https://x.com/korpendine/status/1963579641169420309）

[29] https://note.com/meetalive/n/na53457337892

いく。他動詞を能動態で用いることが重要であり、受動態（例「追いやられている」）は、動作の主体が曖昧になるため避けるべきとされる。他動詞モデルの効用は、主張が観察の漠然とした記述ではなく、著者が自分の責任において提出している、論証が必要なものであるという側面が際立つ(p. 24)ことであるとされる。

太郎丸は以上の他動詞モデルの議論について、「能動態で「強い」動詞を使えばアーギュメントを強くできるのか？」という節を設けて、「馬鹿げた議論だと思う」と却下する。そして、いくらでも作れる反論の 1 つとして、次の例を上げる。まず、「京都大学の学生のうち何パーセントが危険ドラッグの利用経験があるのか？」という問いは「あるのか」という自動詞を元にしている。これを、他動詞・能動態の「利用する」という「be, have, give, take などよりは強い動詞」[30]を用いて、「京都大学の学生のうち何パーセントが学生時代に危険ドラッグを利用したか？」にしても、利用時期の特定があること以外については論証すべき事柄が同じである。したがって、これだけではアーギュメントは強くなっていない。ここから、「言葉を言い換えるだけでアーギュメントが強くなるなんて魔法が存在しないのは、自明だと思う」と述べている。続いて、阿部が鍛え上げて見せた、「男性中心主義的な物語が女性キャラクターを排除している」についても、「曖昧で反証の困難な主張」と評する。これが「強い」理由が理解できないと述べて、「(阿部の言う通り反証不可能なアーギュメントは論じる価値がない)。どのような証拠を示せば「物語」が女性キャラクターを「排除」していると言えるのか」と疑問を呈し、これでは、鍛えられる前の弱いアーギュメント「アンパンマンは男性キャラクターばかり描く」とほとんど同じだと論じている。さらに、女性キャラクターを排除していることは男性中心主義的であることとほぼ同じであるから、アーギュメント「男性中心主義的な物語が女性キャラクターを排除している」は「トートロジカル」だと断じている。

価値を俯瞰した言語学者の立場から両者を調停してみよう。まず、「男性中心主義的な物語が女性キャラクターを排除している」において「物語」を修飾する「男性中心主義的な」という部分は、普通、制限的であり、物語が男性中心主義的であるということは前提になる。しかし、おそらくここでは非制限的であり、主張に含まれるのだろう。そうであれば、「物語が男性中心主義的であり、女性キャラクターを排除している」となり、トートロジーから遠ざかる。もっとも、主張を前提であるかのように見せている点でミスリーディングだという、表現についての批判は起こり得る。

太郎丸が（　）に入れた、「阿部の言う通り反証不可能なアーギュメントは論じる価

---

[30] 「have, do, make, be」(ママ)などの意味の希薄な動詞を避け、「強い（＝具体的な意味をもつ）動詞」を使えというトゥラビアン（2012）のアドバイスを阿部は引用していて、他の場所では、*have*, *take*, *get*, *make* を英語の基本動詞で他動詞であるものの例として挙げている。これらを受けての記述である。

値がない」のところに、すれ違いの原因が見て取れる。阿部がアーギュメントの反証の可不可をどう理解しているかというと、『教科書』で「反論可能性」が初めて出てきたところに注が付いていて、「これはアカデミアの世界においては一般的に「反証可能性」というタームで知られている」に続いて、ポパー（1971）が挙げられている。ところが、阿部の「反論可能性」―前述のように、「本当にそうなのか？ じゃあ論証してみろ」といった反応を読者から引き出せること―とポパーの「反証可能性」は大きく異なる概念である。後者は、科学哲学における科学的命題の境界条件で、ある命題が科学的であるためには、それが経験的に反証され得ることが必要、つまり、何が起これればその命題が誤りとわかるかが明白である必要があるという条件である。これは、経験的予測に基づいて反証できるようになっているかどうかという理論の構造の問題であり、読者から特定の反応が想定できるか否かの問題ではない。精神分析のように反証不可能と批判されることが多い理論でも、たとえば「幼少期に親との関係の中で抱いた禁じられた欲望や恐怖が、意識から締め出され、今、不安という形で間接的に噴出しているのだ」という主張に対し、「本当にそうなのか？ じゃあ論証してみろ」といった反応を読者から引き出すことは可能であることからも、両概念は異なることが明らかである。阿部がポパーを引用しながら使っている「反〇可能性」は、実際にはレトリックによって対話が喚起される可能性の話であるから、ポパーの科学哲学の用語を流用するのは極めてミスリーディングであり、実際に太郎丸はミスリードされてしまっている。なお、科学哲学は〈真〉についてのメタ的考察（これ自体はどの価値についても〈真〉の探求）であり、〈善〉の実践者と特徴付けられる阿部の専門からは価値軸も活動層もかけ離れている。

太郎丸の考えるアーギュメントの強弱は、論証の難易による。太郎丸は、「他人の研究のアラを探して、重箱の隅をつつくような批判」はサンプルの偏りや論理の飛躍を指摘するだけで論証できるから弱いアーギュメントであるとする。そのような批判があてはまる例としては、「マックス・ウェーバーの議論が男性中心主義的で、中産階級的な価値観から書かれている」というものが挙げられている。これは、表現はともかく、阿部にとっては弱くないアーギュメントか、少なくとも他動詞モデルで強くできるものだろう。一方、太郎丸にとってアーギュメントを強くする方法は、「単なる観察可能な事実の記述を超えて、もっと大きな問題にアプローチするうえで役に立つように、問いを変更」することである。彼自身の京大生のドラッグ使用の例については、より大きな問いとして、「現代までに新左翼文化はどのようなものに変容したのか？」を据えた上で、「かつての新左翼とドラッグの関係を踏まえたうえで、現代の京大の左翼学生のドラッグ利用について調べる」ということにすれば、自動詞のままでも「議論はずいぶん「面白く」なっていると思う」と述べている。アンパンマンの例についても、自明ではなく面白いアーギュメントとして、「世相や作者のやなせたかしの経験を反映して時代によって女性キャラクターの数や記述が変化している」を挙げている。いずれも、〈真〉の

探求になっていて、後者も阿部が主張しそうなものではないことにも注意されたい。このように、太郎丸にとってのアーギュメントの強弱は、主張の内容に関わるもので、それを論証することの難易によるものである。もっとも、それとある程度正の相関がありそうな「面白さ」の方が重視されている。

一方、阿部のアーギュメントの強弱は、前述した本人の言に反して論証の難易に尽きるものではない。尽きるのであれば、上のように太郎丸とこれほど話が噛み合わなくなることは考え難い。では論証の難しさ以外のアーギュメントの強さとは何なのか、正確に突き止めることは難しいものの、（強い）アーギュメントと対置されているものが、「誰もがただちに納得してくれる「正しい」議論」(p. 21)、「「考えさせられた」とか「X が重要だと思う」」といった、「論証なしに誰もが納得するような自明な意見」(p. 21)や「観察の漠然とした記述」(p. 24)であること、そして、アーギュメントには、筆者の責任、特に論証責任が強調されていることから考えると、容易ではない倫理的説得を可能にする力の度合い―情動を喚起する力・価値の共鳴を呼び起こす力・印象を形成する力―といった意味合いがアーギュメントの強弱にはあるとみなすのが最も合理的であると筆者は考える。そうだとすると、太郎丸が問うた「どのような証拠を示せば「物語」が女性キャラクターを「排除」していると言えるのか」ということは、論証ではなくレトリック―修辞という限定された意味よりむしろ、古代ギリシャ的な弁論術―の問題であるということになる。そして、このことは「なんで自動詞とか他動詞とかが[アーギュメントの強さに 引用者]関係するのか、それこそちゃんと論証してほしい」という太郎丸の質問の答えと密接に関わっている。最後にこの問いに、価値を俯瞰した言語学者の立場から答えてみたい。太郎丸の言う通り、「他動詞を使えばアーギュメントが強くなる」という言説は、真偽の観点からは明らかにナンセンスである。しかし、阿部は、〈真〉の探究においてアーギュメントの強化を目指しているのではなく、〈善〉の実践としての道徳的強度を上げるためのレトリックを語っていると考えれば、問題は、他動詞モデルによってアーギュメントが論理的に強くなるか否かではなく、他動詞モデルがレトリックとして有効かどうかである。

実際、他動詞文は少なくとも阿部の研究では有効であると考えられる。ここでもその理解の鍵となるのは、阿部の目指す価値である。まず、他動詞文は、事態を以下のように構造化する。

動作主（主語）が被動者（目的語）に対して行為（他動詞）をした。

これは善の実践において必要とされる道徳判断の対象の形式に合致する。道徳判断は基本的に他動的行為についてなされるのである。たとえば、〈太郎が花子をぶった〉ことに対して、「暴力だ、悪だ」といった道徳判断がなされる。他動詞文には「行為者が誰か」「被動者は誰か」「行為が何か」を明示することによって責任の所在を一義的に定めるという機能がある。一方、非他動詞文の表す〈花子が死んだ／日本人だ／若い〉といった

ことに対して、価値判断はなされても、道徳的善悪の判断はなされない。「男性中心主義的な物語が女性キャラクターを排除している」といった阿部のアーギュメントも、基本的には悪と判断され、批判される行為を表す。もちろん、実際の論文では、「ウェンは単純に有色人種の視点から「癒やしの旅」のホワイトネスを批判するのではなく、[…]冷戦期におけるアメリカの軍事主義がいかに代理戦争を介して黒人とアジア人の人種対立をアジア各地に植え付けてきたかを描いているのだ――そう本論は主張する」(『被害学』p. 311)のように、複雑な埋め込みを伴っているが、一番深く埋め込まれているのは、下線部の他動詞文で表される、道徳的に悪と判断される行為である。つまり、阿部にとって他動詞モデルは、第一に批判したい暴力行為を描くためのフレームであり、典型的には他動詞文の主語に加害者、目的語に被害者を据えて、動詞で暴力行為を表す。[31]

さらに、他動詞文は、「太郎が花子を殺した」がそうであるように、主語で表される動作主が意図的に自らのエネルギーを、目的語で表される対象に及ぼした結果、対象が位置ないし状態の変化を被ることを典型的には表わす(野村 2014: 126)というのが認知言語学の定説となっている。これは典型的な場合のことではあるが、それ故に、以上の特徴が実際には一部当てはまらない事態を描写するのに他動詞文を用いた場合にも、当てはまるかのような印象を与えることがある。上の「冷戦期におけるアメリカの軍事主義が代理戦争を介して黒人とアジア人の人種対立をアジア各地に植え付けてきた」も、実際はともかく人種対立が意図的に植え付けられたかのような印象を与える。他動詞モデルは、主張における「主体・客体・行為」を明示するだけではなく、責任の所在を強制的に露出させる働きがある。阿部が暴力を発見し、指弾するにはまさにお誂え向きの道具立てである。

もちろんこれには弊害もあり得る。実際にはなかった意図やそれに伴う責任があるかのようなナラティヴが作り出されてしまうということである。「男性中心主義的な物語が女性キャラクターを排除している」も、作者が実際そうでなくとも意図的に行ったかのような印象を与える。これは、作者が性差別主義者・ホモソーシャル・ミソジニー等々の烙印を押され、作品および作者の表現行為がキャンセルされることにつながり得る。これはまさに、阿部が以下で述べている「ナラティヴが暴力を生む」メカニズムによるものである。

> ナラティヴが暴力を生むのは、誤った説明で誤った対立を生むことによってである。じっさいは複雑でそのように整理すべきではない事象を被害と加害の二元論によって単純化しつつ、問題を善き「われわれ」と悪しき「やつら」の対立へと還元し、

31 こう考えると、『教科書』のアーギュメント「論文とは、ある主張を提示し、その主張が正しいことを論証する文章である」が他動詞モデルに従っていないのも納得がいく。これは、〈真〉の主張、あるいは規範的な言明かもしれないけれども、少なくとも暴力の話でも道徳判断でもないからである。

暴力と加害を他者の領域に追いやる、(『被害学』p.22)

この文には続きがある。

そのようなナラティヴの諸効果を暴くために、そしていかにわれわれが意図せずそのようなナラティヴに毒されて真の暴力の所在を見失っているのかを暴くために、被害学はある。(p. 22)

ナラティヴの被害学が対象とするナラティヴの暴力を生み出す装置として、他動詞モデルが使われ得る。まさに、阿部にとって他動詞モデルは諸刃の剣なのである。

他動詞モデルは、意図的行為に対する道徳判断を主張する〈善〉の実践においては強力だが、〈真〉の探究としてはレトリック以上の意味をなさず、それに伴って、〈善〉の実践と〈真〉の探究では異なる「アーギュメントの強さ」があることが明らかになった。〈真〉の論証をレトリックでごまかさないためにも、この峻別は重要である。

6. 小括

ここまで論じたこと以外にも、〈真〉指向の欠如は、『教科書』の様々な点で見て取れる（「真理」という語は『教科書』にはない）。第 3 章「パラグラフをつくる」の前の章は、「「論証」とは、そして「正しい」とは、いったいどういうことなのだろうか。」(p. 42)と始まっている。しかし、続く章は、極めて抽象的な論証の説明―事実と論理で飛躍を埋める―と、形式的なパラグラフ構造などの外形的な説明があるだけで、結局、これらの内実が何かという問題には次の答えしか与えられていない。

論文とは、イントロで飛躍したアーギュメントを提示し、本文の論理的なパラグラフでその飛躍を埋める文章である。これが、現在のわたしたちのアーギュメント「論文とは、アカデミックな価値をもつアーギュメントを提出し、それが正しいことを論証する文章である」の後半部分「それが正しいことを論証する」の具体的な意味だ。(p. 46)

この「正しい」は、〈善〉の意味なのか〈真〉の意味なのか？ どちらかというと著者にとっては前者であるように思われる。阿部は、「論文とはアーギュメントを提出してそれを論証する場であ[る]」と書いている直前に、論文では、「バカヤロー」と言いたいといったような感情のエネルギーを、学術的な手続きを踏んでアーギュメントとして提示することになると述べているからである(p. 211)。そのような感情のエネルギーは、〈真〉とは縁遠く、〈善〉と密接な関係にある義憤のようなものだろう。

「あなたが取り組んでいる研究の究極目的はなんなのか」(p. 140)と阿部は問う。『まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書』の読者は、同書をどこまで真に受けるかを判断するにあたって、研究活動において阿部のように〈善〉の実践をしたいのか（詳しくは続稿参照）、太郎丸や筆者のように〈真〉を探求したいのか、あるいは別の価値・活動層を追求したいのかを自らに問う必要がある。その際に、価値指向モデル

の知識が有益である。それは同時に、価値の異なる他者の理解も促進する。実際、筆者や筆者の学生は、本モデルを学ぶことで、他の価値軸に駆動されている人の行動が以前よりもよく理解できるようになった。それだけでなく、そのような人を高く評価するようにもなった（ただし、その場合の理解は自分が元々指向している価値の理解と同様のものではないだろう）。価値指向モデルは、「価値の二重の盲目性」を克服し、異なる価値軸に駆動されている他者の言動をよりよく理解するという〈真〉の目的を達成した後、それをインストールした人が〈共感〉等の他の価値を達成するためのツールとなり得る。

＊

続稿では、本稿に引き続き、阿部幸大の人文学批判と人文学暴力否定論、及び、彼がそれを実践する枠組みである「ナラティヴの被害学」について、本稿で提示した価値指向モデルの観点から読み解いていく。7 節では阿部の人文学研究がどのような経緯で初期の作品論から〈善〉の実践理論である「ナラティヴの被害学」に至ったのかを、価値軸に注目しながら論じる。8 節では「ナラティヴの被害学」の枠組みを紹介し、それがどのような形式でどのような〈善〉を実践しようとしているのかを示す。9 節では「ナラティヴの被害学」を〈真〉の欠如という観点から批判的に検討する。10 節では、日本の人文学の刷新という阿部が二書に託した野望が、まさに阿部が批判するアメリカのイデオロギーの意図せざるセルフパロディになっていることを示す。

参考文献（続稿の文献表を兼ねる）　Belcher, W. L. 2019. *Writing Your Journal Article in Twelve Weeks*, 2nd ed. Univ. of Chicago Press.／Furui, Y. 2019. “Bartleby’s Closed Desk.” *Journal of American Studies* 53(2): 353–371.／Gupta, A. and S. Mackereth. 2023. “Definitions,” *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Fall 2023).／Haslam, N., Tse, J.S.Y., & De Deyne, S. 2021. “Concept Creep and Psychiatrization.” *Frontiers in Sociology*. doi:10.3389/fsoc.2021.806147.／Henrich, J., Heine, S. J. & Norenzayan, A. 2010. “The Weirdest People in the World?” *Behav. Brain Sci.* 33(2–3): 61–83. doi:10.1017/S0140525X0999152X.／Stevenson, C. L. 1948. *Ethics and Language*, Yale UP.／Stouffer, S. A., Suchman, E. A., Devinney, L. C., Star, S. A., & Williams, R. M., Jr. (1949). *The American Soldier.* Princeton UP.／Wilson, D. and Sperber, D. 2012. *Meaning and Relevance.* Cambridge UP.／ヴェーバー, M.（中山元訳）. 2021.『職業としての政治／職業としての学問』日経 BP 社.／梅棹忠夫. 1969『知的生産の技術』岩波書店.／上野千鶴子. 2012.『ナショナリズムとジェンダー 新版』岩波書店.／エーコ, U.（谷口勇訳）. 1991.『論文作法』而立書房.／ポパー, K. R.（大内義一・森博訳）. 1971.『科学的発見の論理』恒星社厚生閣.／川喜多二郎. 1967.『発想法』中央公論社.／木下是雄. 1981.『理科系の作文技術』中央公論社.／香西秀信. 2016.『議論入門』筑摩書房.／ステッカー, R. 2013（森功次訳）『分析美学入門』勁草書房.／テイラー, J. R.（西村義樹他訳）. 2017.『メンタル・コーパス』くろしお出版.／トゥラビアン, K. L.（沼口隆・沼口好雄訳）. 2012.

『シカゴ・スタイル 研究論文執筆マニュアル』慶應義塾大学出版会.／戸田山和久. 2022.『最新版 論文の教室』NHK 出版.／野村益寛. 2014.『ファンダメンタル認知言語学』ひつじ書房.／野矢茂樹. 2018.『増補改訂版 大人のための国語ゼミ』筑摩書房.／ハイト, J.（高橋洋訳）2014.『社会はなぜ左と右にわかれるのか』紀伊國屋書店.／ピンカー, S.（幾島幸子・塩原通緒訳）. 2015.『暴力の人類史』青土社. ／古井義昭. 2024.『誘惑する他者』法政大学出版局.／山泉実. 2025.「阿部幸大の人文学を価値指向モデルで読み解く」『日本語・日本文化研究』35. 大阪大学人文学研究科. ／ルキアノフ, G.・ハイト, J. 2022.『傷つきやすいアメリカの大学生たち』草思社.／ロールズ, J.（川本隆史他訳）2010.『正義論 改訂版』紀伊國屋書店.